

芸術学

修士（美術研究科）

岡田 尚也

目次

序論

第一章 パレルゴン論

第一節 『判断力批判』における「パレルゴン」とは何か

第二節 実例—「額縁」、「衣服」、「列柱」—

第三節 美しいものの判断力に潜む「粹」

第四節 パレルゴンの働き、粹の労働性

第二章 靴をめぐる問題—ゴッホの《古靴》中心に—

第一節 シャピロとハイデガーのレスポンス

第二節 ハイデガーと描かれた靴

第三節 対ではない可能性をもった返却

結論

本論文は、ジャック・デリダの著作である『絵画における真理』を中心に、同書をデリダが「絵画論」として提示しているという前提に立って、考察を行う。デリダは同書において、「絵画」の「周辺部」を巡る、という直接的ではない方法で「絵画」に言及しようとしている。つまり、絵画にまつわる二項対立における価値付けを回避することで、「絵画」を自ずと立ち現れさせるように記述している。そうした中で、本論文は、デリダの想定する「絵画」、あるいは「絵画論」がいかなるものであるのか、ということについて考察することを目的とする。

まず、序論においては、『絵画における真理』の最初の論考、「パス＝パルトゥー」で触れられているセザンヌの言葉を中心に、その周囲にある言葉や概念について確認する。また、そうした言葉や概念を前提として、デリダが「絵画」についてどのような方法で論じているのかを検討する。

第一章では、イマヌエル・カントの『判断力批判』に基づいた「パレルゴン論」について述べる。カントにとって、「絵画／額縁（エルゴン／パレルゴン）」という二項対立における「額縁（パレルゴン）」は、「装飾」であり、内的な「エルゴン」に対するあまり重要ではない「付属品」のようなものでしかなかった。それに対して、デリダは、そうした「額縁（パレルゴン）」の価値を低く見積もるような対立の中に、「パレルゴン」による「エルゴン」への代補の可能性、あるいは、デリダ自身が考えるところの「パレルゴン」の働きの忠実な再現を見出すのである。つまり、「額縁（パレルゴン）」は、「絵画」にとつてのまったくの外でも、まったくの内でもないようなものであり、「絵画」と「環境」のどちらからも引き離されるとともに、どちらにも属しているものであると言える。そうしたことから、「額縁（パレルゴン）」は、「絵画」を代補していると言えるし、「絵画」をある意味で産出しているとも考えられうる、とデリダは示している。また、こうした額縁という一実例から、額縁のもつ「粹」的機能を取り出すことで、デリダは、『判断力批判』の「美しいものの分析論」において、はじめから「粹」の嵌め込みが行われていたことを指摘するとともに、その「粹」の嵌め込みに正当性がないことも主張

岡田 尚也

OKADA Takaya

代補の代補としての絵画論 — 『絵画における真理』を中心に —

するのである。そのうえで、デリダは、そうした分析論によって提起された諸基準、あるいは、芸術に関する哲学のあらゆる価値的諸対立が、外部から持ち込まれた「粹」によって規定されているとするなら、そうした価値的諸対立全体が「パレルゴン性」に汚染されていることを指摘するのである。

デリダは、そこから「パレルゴン」の働き一般というものを抽出するのである。つまり、「パレルゴン」の働きとは、現実存在するものではなく、自由なエネルギー、理論的虚構といったものに潜む欠如に対して、差延的なものを残したままの状態、縁取りの規定を行うものであり、それはある種の実践においてのみ働くことができる、というものである。すなわち、デリダの示す「パレルゴン」というものは、「エルゴン（絵画）」の何らかの欠如に触発されて行われる縁取りのようなものであり、それは実践においてのみ稼動するような、二項対立の間にある第三項による働きのことなのである。

第二章では、『絵画における真理』の最後の論考である「返却」を扱う。そこでは、ゴッホの「有名な絵」に描かれた二つの靴をめぐり、メイヤー・シャピロとマルティン・ハイデガーの論争についての言及がなされている。デリダは、両者の対立について、描かれた靴が「一足」あるいは「対」であることを前提にして、帰属決定の契約の制度が成り立っていることを明らかにするのである。

しかし同時に、その描かれた靴に対する両者の理解の深度の違いについての指摘とともに、デリダは、ハイデガーの理論に対して詳細な読解を加えている。そうしたデリダの読解によれば、まず、ハイデガーが、ゴッホの靴の絵をある特定の絵画に限定して論じようとはしていないし、描かれた靴が問題になるとき、その絵は道具の有用性について語るためだけに持ち出されたものであり、その靴を画家自身に帰属させるべきとするシャピロの主張は当たらないのである。そうであったとしても、デリダは、その靴が、ハイデガーの言説において、最終的に世界と大地へと帰属させられてしまっていることから、ハイデガーとシャピロが、その描かれた靴を「対」として認識していることには変わりない、と指摘するのである。

そうした状況に対して、デリダは、「対」というものに疑問を呈し、「対ではない」靴の可能性を模索するのである。そうした「対ではない」という可能性は、「亡霊」や「絶対的な奇数性（不均衡）」を生むのである。つまり、この「亡霊」は、絵画に関する哲学におけるあらゆる対立項に還元することが不可能なものであることから、「絶対的な奇数性（不均衡）」を生むのである。デリダは、そうした「絶対的な奇数性（不均衡）」というものを常に考慮に入れながら、「rendre（返却、描く）」ということがなされなければならない、と述べているのだと考えられる。

このように、デリダの言説において、「パレルゴン」的な第三項、あるいは「絶対的な奇数性（不均衡）」というものが、「エルゴン（絵画）」を成り立たせるための重要な要素であることがわかる。同時に、「パレルゴン」的な第三項というものは、「エルゴン」の欠如に触発されて、「エルゴン」の代補として、見出されるものでもある。つまり、『絵画における真理』は、本来であれば、デリダにとっての「エルゴン（絵画）」に触発された代補（パレルゴン）としてあると考えられうる。しかし、同書においてデリダは、「パレルゴン（他人の言説）」について言及するのみである。そうしたことから、同書を「パレルゴン論」として読解することも可能ではあるが、それは「パレルゴン」を「エルゴン」として主題的に扱うことであり、「絵画論」ではなくるとともに、「パレルゴン」と「milieu（中心、環境）」という新たな二項対立を生み出す可能性があり、デリダの意図する「パレルゴン」のありかたとは異なると思われる。そのため、あくまで同書を「絵画論」として扱うのであれば、筆者には、デリダが触発されたであろう「絵画」がいかなるものであるのかということについては、「わからない」と結論づけるしかないと考える。こうしたことから、筆者は、デリダの言説がどこまでも「絵画」にまつわる「他人の言説（パレルゴン）」に対する「言説（パレルゴン）」でしかなく、「エルゴン（絵画）」に対する「パレルゴン」の「パレルゴン」、つまり、代補の代補でしかないと考える。さらに、そうした「パレルゴン」のあり方は、デリダが言うところの「危険な代補」である可能性さえあると考察する。